

祝 辞

東京大学総長

向 坊 隆



エネルギー・資源の安定供給が、わが国の将来のための重要課題であることは今更申すまでもありません。

この課題を解決するのは容易なことではなく、科学技術をはじめ、政治、経済などあらゆる分野にわたる個別的ならびに総合的な努力が必要です。その関連するところ、既存の基礎科学から応用の諸分野、人文・社会科学などすべての範囲に及ぶといってよいでしょう。また、それらを含めたシステムとして考えることも重要であります。

このような事情をふまえ、今回、学界、官界、産業界の方々が一体となって、エネルギー・資源研究会を設立されましたことは、誠に時宜を得たものとして、心からお喜び申し上げます。

研究会の健全な御発展を切に期待して祝辞と致します。

「一粒の麦」

東京都立工科短期大学学長

渡 辺 茂



エネルギー・資源研究会発足にあたり、二、三の感想を述べさせていただきたいと思います。

石油ショックがおこったのは昭和48年でしたから、あれからもう7年の年月が流れているのに、エネルギーにたいする決定的な解決法は何一つ実現していないということを認識しておくことからはじめたいと思います。

研究開発のリード・タイムの長いことはよく知っていましたが、いまここで具体的な実感として、研究開発のむつかしさと時間がかかるということを、あらためて思い知らされたような次第です。

いったい、わが国は、ハード・パスをいくべきか、それともソフト・パスに改めるべきかについては、ロビンズさんが来日したのを機会に、いまやホットな論争がはじまるようになりました。

どうもこれに確実に答えられる日本人は、ハード派にもソフト派にもないようですが、そういう点を明らかにする意味においても、本研究会の発足は、大変に意義のあるところであります。

エネルギーの研究は、国として独立を保つ意味においても大切なことです。エネルギー自給率が、現在のように10パーセントを割っている状態では、またこの状態がさらに数年間は改善不可能であるといわれているに至っては、研究を除外して、エネルギー問題を解決するみちがないことを意味します。エネルギー自給率をすこしでも増加することは、国際社会で国の発言権を高めるうえにおいて、絶対に必要です。しかし自給率を1パーセントだけ増加するということは、この5年間にはほとんど不可能とされています。だからといって、石油をふやすことも、原子力をふやすことも、そう思うようにはいかない現状です。エネルギー自給率向上のむつかしさを思うにつけ、本研究会発足の意義は高く評価されるべきものでしょう。

そしてさらに大切なことは、エネルギーの地域性という点であろうかと思えます。つまりポスト石油時代のエネルギーは、地域マインドを除外しては成立しません。たとえば原子力発電が地域を無視できないことは今更いうまでもありません。また自然エネルギーともなりますと、その地域に質のよいエネルギー源がないかぎり成立しないわけです。たとえば風のないところに風車をたてても役に立たないわけですし、日照時間の少ないところでは太陽熱の利用もはかばかしくやれません。このように自然エネルギーはローカル・エネルギーの特性をよく捉えたものでなければならないことは、いまさらいうまでもないことです。

また今後のエネルギー問題は、地震、内乱、占領といった非常事態に耐えるものでなければならないという配慮もいると思います。エネルギー問題は、国内だけの話ではなく、途上国はじめ、さまざまな風土と歴史をもつ国々にたいして必要なものであり、それは、国をこえて、地域として結びつくという面があります。

そういうように、さまざまな面から、エネルギー問題には、地域という意識が重要であると思えます。

このときあたり、大阪の地に、エネルギー資源研究会が発足するということは、とくに地域を意識するという意味において、たいへんよかったと思っている次第です。

以上はエネルギー問題を中心として、本研究会がこれから果すであろう役割について述べましたが資源についても同様のことが言えると思います。さいわい材料資源については、目下のところ、それほど切迫した状況ではありませんが、エネルギー同様、材料資源にも恵まれないわが国のことです。いつの日にか資源ショックにおちいるか分かりません。

本研究会は、そういった将来の不安を無用の心配とするためにも、存立意義のあるところであり、ここに研究会という一粒の麦が播かれたならば、かならずや社会のニーズに応じて、ゆたかに成長し、多くののりをもたらしてくれることを信じる次第です。